

第八回ワークショップ（合評会）

2011年5月25日開催

■合評テキスト

Strathern, Marilyn

1996 Cutting the Network. *Journal of Royal Anthropological Institute*
2(3): 517-535.

2002 Externalities in Comparative Guise. *Economy and Society* 31(2):
250-267.

まず、大杉氏からストラザーン論文について背景説明があった。ストラザーンはメラネシア社会における生の形式や美学を意図して図式的に描き、その図式と欧米社会の図式を比較することによって知的啓発を試みてきた。ポストコロニアル論が喚起力を失いつつあるなか、現代人類学の理論潮流の一つとして台頭しつつあるのは、科学社会学者ブルーノ・ラトゥールらが提唱するアクターネットワーク論（ANT）である。ANTとストラザーンの議論には多くの共通点を見出せるが、後者はネットワークの様式や美学の多型性に特に注意を促している点で特徴的である。今回扱う二つの論考は、この特徴をよくあらわしている。

以上の大杉氏の解説を踏まえて、以下5点について議論がなされた。

- I テキスト理解
 - II 人類学的理解における正しさの基準
 - III “Cutting”、再帰性、文脈
 - IV フレーム、制度化、進化論
 - V 横に広がる再帰性
-

I テクスト理解

”Externalities...”論文で用いられる外部性の語は分析概念なのか、それとも対象内在的なものなのかという質問があった（大河内氏）。これに対し、外部性という概念は経済活動の現場において「経済」というフレームの中に何が組み込まれる／組み込まれないのかを問題化する分析概念であり、ANTの代表的論客であるミシェル・キャロンが近代経済学から借用した概念であるとの返答があった（大杉氏）。

次に、同論文におけるカナダの新生殖医療の議論は、再帰性をめぐる議論と言ってもよいのではないかと論点が提出された（深澤氏）。これに対し、当該議論は、たしかに再帰性概念と関連付けできるものの、ストラザーンが特に注意を喚起しているのは知的所有権と新生殖医療という二つの現象から抽出できるフレーム化のありかたの複数性であり、ギデンズ／ベックらが想定する「再帰的近代」の普遍性とは、議論の方向性が異なるのではないかと応答があった（大杉氏）。

続いて、フレーム概念を用いることの人類学的意義が、理論的背景に通じていないので理解しにくいとの指摘があった（武村氏）。これに対し、（1）フレーム概念は、人類学理論史にさしたる位置づけをもたない輸入概念であること、（2）同概念をゴフマンや経済学から借用したキャロンは、市場取引が実践的に可能となるためには、市場という場の持続的フレーム化（外部と内部の設定）が必要であることを強調したこと、（3）それに対してストラザーンは、ひとくちにフレーム化といっても、外部が先取的に内化されてしまう場合や、内部の中核を占めながら外部性をもつ内的外部がある場合など、フレーム化には多様性が認められることを指摘したこと、以上3点の説明があった（大杉氏）。

最後に、”Cutting...”論文で提出されるメラネシア社会のネットワーク的存在論は、当該社会を研究する者に如何なる衝撃を与えたのかという問いがあった（武村氏）。ポストコロニアル論争をへてエージェンシー Agency 概念が個別社会を越えて適応される時代にあって、ストラザーンは人格 Person の構成が個別社会で想像されるネットワークのあり様に依存していることを強調している。この意味で、ストラザーンは人類学の伝統的発想を堅持しているといえるが、この相対化の試みを、通常は比較されない事象間の巧みな比較を通じて実演して見せているところに意義があるとの、応答があった（大杉氏）。

II 人類学的理解における正しさの基準

同論文で用いられる婚資 *bride wealth* と価格 *price* という語の関係についての疑問が出された（井川氏）。これに対し、（1）従来人類学では、現地社会で価格あるいはそれに相当する語が用いられる場合でも、誤解を避けるため婚資の語をより頻繁に用いてきたこと、（2）また、嫁の価格と表現されているとしても、支払いがなされる当事者間の関係性が私達と異なるので、おのずと価格概念の内包も異なること、以上二点が指摘された（大杉氏）。

また、メラネシア社会について、ストラザーンとは別の説明の仕方はないのか、説明の仕方相互で論争になることはないのかという質問が出た（井頭氏）。この質問に対し、人類学的調査の場合は複数の人が同時に同じ場所を観察することはまれなので、解釈相互が直接衝突するというよりは、類似対象の観察を通して似た解釈が生まれる傾向にあるとの回答があった（深田氏）。

では、自然化科学的な正しさの基準と比べた場合、人類学的理解にとっての正しさの基準とは何であるのか、また何を持って理解が進んだと言えるのかという疑問が出された（井頭氏）。その疑問に対し、論証目的によって調査した現実の描き方が異なってくる一方で、「誰かがやっていることを説明する」という部分だけは決して離れてはいけない基盤としてあるとの回答があった。これに対し、対象を正しく理解するより、違うモノの見方を我々の側に見せることに意義を見出しているのではないかとの意見が出された（井頭氏）。その意見に対し、人類学の意義は民族誌的事実のサルベージというよりは、あるやり方で論じることで異化作用を引き起こすことだとの回答があった（深田氏）。嫌な言い方だが、「彼らのやっている事に矛盾しない範囲でどれだけインパクトのあることを言えるか」という研究に見えるとの声があった（井頭氏）。

III “Cutting”、再帰性、文脈

合評テキストの中で知的所有権の議論をめぐって”Cutting”の概念が登場するが、ストラザーンがそれを再帰性と関連づけているのかという問いが出た（大河内氏）。これに対し、合評テキストの選定者が関連付けているだけであるとの回答があった（大杉氏）。

続いて、生命倫理の分野では研究に際して遺伝子を所持する当人の許可が一般に問題となるので、ストラザーンの説明はかなり違和感があるとの声が上がった（大河内

氏)。これに対し、そうした議論が西欧社会でたまたま価値を持っているだけであると、ストラザーンは言いたいのではないかとの指摘があった（大杉氏）。

また、（１）文脈という概念と暗黙の前提という概念の関係をどのようなものとして理解したらよいのか、（２）もしその２つの概念をイコールで捉えられるのならば脱文脈化とは暗黙の前提が決して必然的なものではないことを理解することなのか、という疑問が出された（井頭氏）。これに対して、暗黙の前提なるものが不安定ながらも繰り返し立ち上げられていること、つまり、暗黙の前提を不安定化させる脱文脈化の契機が日常に遍在しているのかかわらず、文脈が問われることのない前提としてなんとか成立していくマイクロなプロセスに興味をもっているとの、応答があった（大杉氏）。

IV フレーム、制度化、進化論

ストラザーンの議論を敷衍して、例えば何が芸術 art というフレームに含まれ、含まれないのかといったフレーム化の営みは、人文科学の諸実践とも決して無縁ではないのではないのかとの提起があった（大杉氏）。その提起を受けて、例えば最近のアニメが学術的議論に値する芸術であるかどうか等をいまだに問題にする人もいるが、芸術という枠組み自体が今では完全に無効化していると個人的には思えるので、少なくとも自分にとっては、「芸術」という枠組みを揺るがせたり広げたりすること自体にさしたる意味があるとは思えないとの意見が出された（武村氏）。これを受けて、フレームの枠組みを広げていくべくきだといったリベラルな態度表明、そしてその背後にあるフレーム化＝制度化に対する否定的な評価だけではおそらく充分ではなく、私たちが依拠せざるをえないフレームのあり様とその成立のプロセスに着目していくことが肝要なのではないかとの議論がなされた（大杉氏、武村氏、大河内氏）。

芸術というフレームの成立を進化論的に考えられないか、つまり説得力を持つ運動に人が集まり、何が芸術であるかというフレームが共有されてきたと考えられないかという問題提起があった（井頭氏）。結果論としての進化論なら異論がないが、「素晴らしい先見の明がある運動推進者がいた」といったような目的論的な進化論には違和感があるとの反応があった（大杉氏）。これに対し、素晴らしい推進者は必要ないが、新たな考え方の提案者はいて、それを引き継ぐ形で芸術というアイデンティティが成立しているのではないかという考えが示された（井頭氏）。

これを受けて、ヨーロッパがアフリカのやり方を模倣すると芸術として評価され、当のアフリカ人がやると「物まね」として否定的に評価されることに話題が及んだ。何が芸術かを決めるのは芸術という制度の中にいる人達だが、同時に彼らは芸術とい

う枠組みを歴史的に変えてきたのではないかという問題提起である（大河内氏）。これに対し、権力論は事態を説明しやすくする反面で、芸術フレーム成立過程の詳細やそこにある揺れを見えにくくしてしまうのではないかとの反応（大杉氏）、さらに、経済学で言う Lock-in のように、偶然成立した事柄の回りに制度が成立していくと考えれば権力概念は必要ないのではないかという意見がでた（深田氏）。そうした意見に対し、フレーム化をめぐる進化論的説明にはやはり違和感があるとの応答がなされた（大河内氏）。

V 横に広がる再帰性と美学

“Cutting”を再帰性の問題と絡めてきたが、“Cutting”されない連続性もあるということなのかという問いが出た（深澤氏）。これに対し、文脈化の行為自体が、文脈を視野に収める限りで脱文脈化の契機を含みこんでいるとの、昨年度の深澤氏の提起に触発された応答があり、非連続化と連続性の表裏一体性が確認された（大杉氏）。さらに、再帰性の視点は通常メタな視点を前提とする議論になるが、差異化のような横に広がる動きを敢えて再帰性と呼ぶのもおもしろのではないかとの声があった（深澤氏）。最後に、ネットワークの様々な形式を、美学として捉えなおす可能性について、より考察を深めていきたいとの発言があった（久保氏）。